

Title	テューダー中期における教区教会と民衆
Author(s)	指,昭博
Citation	待兼山論叢. 史学篇. 1985, 18, p. 45-65
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48006
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

指

昭

博

的な事件の連続に解消してしまうのでは、この変革の重要な側面を見落すことになるだろう。(2) 理念のレベルに留まらず、具体的な教会のあり方をも変化させたのである。この点を無視して、宗教改革を国制史 宗教体制が変化し、その混乱は、好むと好まざるとに関わらず、一般教区民をもまき込んでいった。教義の変更は 影響が軽視されがちであったようにも思われる。「国家の仕事」であったが故に、国王の交代に従ってめまぐるしく 改革史研究の主流をなす見方であった。しかし、こうした見方からは、宗教改革が当時の社会や人々に及ぼした 「イングランドの宗教改革は国家の仕事であった」というのが、国制史的な立場での、従来のイングランド宗教(1)

の時期に関する研究は手薄であり、治世に対する評価も否定的なものであった。とりわけ、カトリックであったメ

なかでも、エドワード六世とメアリの治世はその変動の振幅の大きさ故に、混乱を増大させたと思われるが、こ

アリの治世に対しては「政治的には破綻し、精神的には不毛であり、経済的には無秩序で、知的には活力を失なっ

な人々に焦点を合わせてみれば、メアリ時代のまた別の側面が見えてくるだろう。 く重要な存在ではあったが、当時においては少数派であり、むしろ大部分の者は服従を選んだのである。このよう 目されなかった。確かに、殉教者や亡命者といった確信的プロテスタント達は、後のピューリタンへと連なってゆ ったと言えよう。しかし、このような人々については、その行動の消極性・体制への服従的態度の故に、あまり注 エリザベスが引き継いだ教会がどのようなものであったのか、ということについての理解が必要となるだろう。 乱がもたらした影響を無視できないだろう。特に、いわゆる「エリザベスの解決」の重要性が強調されるならば、 た」という評価が一般的であった。しかし、それ程までに否定的で混沌とした治世であったならば、逆に、その混(3) その混乱とは、何よりも教会の荒廃であり、変転する宗教状況の中で翻弄された下級聖職者や教区民の当惑であ

_

をめぐる教区民の対応を中心に考察し、当時の教会が抱えた問題が何であったのか、また、それがメアリ時代のカ

ただし、ここでは全ての問題を扱う紙数の余裕はないので、聖職者の問題は別稿に譲り、教区教会の状態とそれ

トリック復活の企てをいかに規定していったかを考えてみたい。

な手段でもあった。この点については、メアリ時代の女性の亡命者が次のように語っていることからもうかがえる。(5) が説かれた。当然、教区司祭は教区民の模範となることを求められていた。また、教区教会は教区民監視の有効 った。宗教改革においても、司祭を通じてその時々の公的な教義が教化され、あらゆる面での国王への服従の義務 いまだ強力な統治組織を持たなかったテューダーの諸国王にとって、教区教会はあらゆる政策の実施の窓口であ 新たな「改革」であり、

一○年間ものローマとの断絶の後に、ローマの権戚を再確立しようとすることは、単なる「復活」というよりも、

かなりの困難を伴なうものであったと思われる。その困難を克服するためにも健全な教会

うことが簡単には知られ得なかったのです。」 グランドよりも安全であると考えたのは……そこには教区教会がなく……誰が教会へ来て、誰が来ないのかとい た。この布告の後、我々はもはや〔ロンドンの〕家を守ることができなくなった……我々がアントワープがイン 「その頃、非常にきびしい布告が出て、全ての者に教会へ行き、カトリックのやり方で秘跡を受けるように命じ(6)

ちろん、カトリック復活を目指したメアリやレジナルド・プールにとっても同様であった。プールの考えたカトリ は、まず何よりも、一五五四年の布告によって「全ての主教及び他の全ての〔教会に関わる〕人々は、全ての禄を 等々。当然、これらを実現するには、しかるべき聖職者と健全な教会組織が前提となるはずであった。そのために(8) 自制すべきである。全ての司祭は、その会衆を信仰の原則に従って教育し、説教の義務を果たし、慈善や教育のため ての司牧者はその会衆の所に存在すべきで、不在任者は厳罰に処し、複数の禄を兼任する者は直ちにひとつの禄に 教会で常に挙行されるべき賞讃すべき真の儀式が、以後恒常的に挙行されるように」と命じられているように、(9) 受けたる教区の教区民と共に命令及び監督に従い、その任地において、司祭は礼拝のために担当教区を修復し…… にその収入の大部分を用いなくてはならない。また、未婚であるべきで、「聖職売買の大罪」には厳罰が必要である、 ック復活の基本要件は、一五五五年に聖職者会議において彼が示した改革プログラムにうかがえる。すなわち、全 トリック礼拝復活のために、エドワード時代までにプロテスタント化された教会を旧状に戻す必要があった。 異端を見つけ出すにも、新しい教義を教化するにも、教区教会を把握することが不可欠であったと言えよう。

仰への積極的な恭順を示す教区民もまた必要であったと言えるだろう。 しかるべき聖職者の存在がプールの改革の柱であった。それとともに、その改革を受け入れ、カトリック信

=

で八ポンド以上の出資を余儀なくされた。撤去されたものに代わって、聖卓、聖卓布、(⑵ した後の壁は白く塗られ、その上に聖書の言葉が書かれた。ブリストルの聖メアリ・ラドクリフ教会ではこの過程 スタント化の進行は、教会の様相を一変させた。聖像、祭壇、ルード・ロフト、壁画などが撤去され、壁画を除去 用具を変えねばならず、その費用が教区の負担となっていったのである。とりわけ、エドワード六世の下でのプロテ 的要因であったし、教区教会レベルでも、教義の変更に従って礼拝のあり方が変わる毎に、教会内部の装飾や礼拝 済的な問題を教会に押しつけてきた。そもそも、ヘンリー八世の改革の動機のひとつは教会財産の没収という経済 それでは、メアリ即位以前に教会はどのような状況にあったのだろうか。イングランドでは、宗教改革は常に経 新たな祈禱書、エラスムス

ものですらあったと言われる。そこで、深刻な財政難の解消を目的として、ひとつの聖杯と聖皿のみを残して、残ものですらあったと言われる。そこで、深刻な財政難の解消を目的として、ひとつの聖杯と聖皿のみを残して、残 経て、ノーサンバランド公による教区教会の財産没収にまで至った時、はるかに大きな打撃を与えることになった。 それ以上に、国王による教会財産の没収が、カトリック的残滓払拭の名の下に、一五四七年の寄進礼拝堂解散を しばしば、それは「地方の誇りと自慢の種」であり、教会は「キリスト教徒の信仰の博物館」のような 中世以来の長年に亘る教区民からの寄進によって、数多くの宝石類や高価な礼拝用具を備えている

の聖書註釈などを購入しなくてはならなかった。

た。(5)とつだけであった。この時ブリストルの一四教区全体での没収総額は五二三ポンド一〇シリング八ペンスにのぼっとつだけであった。この時ブリストルの一四教区全体での没収総額は五二三ポンド一〇シリング八ペンスにのぼっとつだけであった。この時ブリストルの一四教区全体での没収総額は五二三ポンド一〇シリング八ペンスにのぼった。 つだけであった。同様に、聖ユーイン教会からは二四九オンス分の礼拝用具が奪われ、やはり残されたのは聖杯ひ 聖杯が七つで一七三オンスあったが、それら全てが奪われ、教会に残されたのは一番小さな一五オンスの聖杯ひと られる。 えている。この時ロンドンでは一六二ポンドの聖餐用具が没収された。没収のはなはだしい例はブリストルにも見 幣が国王陛下のために収用された。それに祭服やコープも。それらは貨幣と並んで大した価値のものである」と伝(3) 様子をロンドンの記録は「五月の初め、ロンドンの……全ての教会の櫃の中にしまわれていた全ての聖餐用具や貨 りの聖杯や聖皿、聖体容器、燭台、香炉、高価な祭服などが、もはや不用のものとして没収が命じられた。没収の(ヒピ/ 聖ニコラス教会では、銀の十字架、銀食器、香炉、聖体容器、聖像牌など、銀で六九四オンス、その他に

売買を扱って各地を巡る商人も存在したという。 されていった。また、教会の修理、維持、貧民救済の費用捻出のために売却せねばならぬ場合もあり、教会財産の(16) 会では、それによって六〇ポンド以上の収益をあげたが、それらも教区のために用いられることなく、 没収とは別に、プロテスタント化の進展に伴ない、教会財産を売却する教区もあった。 ロンドンの聖ボトルフ教 国王に収奪

数個(総計二トン以上)も奪った。 とされるのが、ホリングワースという者で、各地の教会から、しろめ製の器六〇個、 セックスの例を示すと、 収奪は国王によるものばかりではなかった。混乱に乗じて、ジェントリを中心とした私的な略奪も横行した。エ サー・ウィリアム・スタフォードなる者は、配下の者を使って何箇所かの教会から鐘を十 鐘は収奪の格好の対象となったようで、他にも何例かが報告されている。 一ガロン入りポット、 焼き串、

50 の家畜(八八シリングで売却)総額三ポンド以上の物品を略奪している。(18) 現金などを奪い、その上、七頭の雌牛を「国王がお使いになるのだ」と称して奪った。また別の所ででも、 一頭

実に自分の所有とするために心を砕いている。 土地を入手したし、同じく二〇〇〇ポンド以上投資したウィリアム・ピーターは、メアリ即位後もその購入地を確 働いた者でも同様で、異端追及の中心人物であったリチャード・リッチは、エセックスだけで五五○○ポンドもの いて修道院解散を遺憾に思うことと、土地の獲得とは別の次元のことであった。それは、メアリ時代に女王の下で つ市参事会員達も、 道院と協力するが、一度それが解散されるや、すぐにその修道院を獲得してしまった。同僚のカトリック信仰を持 めらうことはなかった。例えば、サー・ジョージ・ロウソンは「恩寵の巡礼」の時には蜂起を支持し、近隣の小修 強いヨークでさえも、修道院解散の際に指導的市民は、信条的にはカトリックでありながら、 こういった教会財産の収奪の場合、略奪者の宗教的心情とはあまり関係がなかったようである。カトリック色の この利益の獲得をた

たのかい。わしが取らなかったからといっても、全ての物が運び去られてしまうのを見なければならないのだぞ。 良いものだと思うかと尋ねると)良いと思っているさ。そうでない理由はないからな、と父は言った。それでは父 わしは何をすべきだったと言うのだ。他の者と一緒に修道院が壊された後に何か利益を得ようとしてはいけなかっ さんが良いと思っていたものを壊してうまい汁を吸おうとしたのはどういう訳です、と私は尋ねた。父が言うには、 仲間と一緒に近在の修道院から材木を奪ってきたのであるが、マイケルの述べる所では「(父に修道士や修道院を こういった彼らの心情をよく示しているのが、ヨークシャの司祭マイケル・シャーブルックの父親である。

このような俗人の態度が後にプールを悩ませることになるのである。それだからこそ、他人がするようにわしもやっただけではないか。」(21)

四

動的、 てきた以上の抵抗感が教区民にあったことが指摘されている。国王側の政策に反発を感じた教区では、没収される(&) かに隠蔽して国王側の収奪の手を逃れたり、様々な手段を構じている。しかし、これらの対応は個々散発的で、受 前に自ら売却してしまったり、また礼拝用具の「保管」のために、信頼できる人間に形式的に売却したり、また秘 それでは、このような収奪政策に対して何の抵抗もなかったのだろうか。この点については最近、 消極的なものであり、 国王側の政策全体をゆるがす程の運動には至らなかった。 従来考えられ

運動の中心であったブリストルでも、カトリックの説教師ロジャー・エッジワースが述べたように「あなた方の中 ように、伝統的、 ていないにもかかわらず、 に反対する騒動が起きたり、一五五四年になっても三○もの教区でミサやラテン語礼拝が行われていない反面、 ない複雑なものであったと言える。多くの史家が反カトリック的雰囲気の下に描くロンドンでも、 ェイン・グレイへの支持がほとんどなく、熱烈なメアリ歓迎があり、メアリ即位の直後には、未だ正式に導入され 当然、メアリ時代の俗人も、従来の殉教者、亡命者、地下プロテスタント組織というイメージだけでは捉えきれ ある者はミサを聞こうとし、ある者はそう思っていない。ある者は告解をしようとするが、ある者はしようと カトリック的なるものとプロテスタント的なものが共存している都市であった。かつてロラード(窓) 政治的配慮もあったにせよ、 自発的に各地区にカトリック礼拝が広まっていったという カトリック礼拝

ある市民がプロテスタント信仰とミサ出席の間で悩み、遂に七歳の我が子を連れて入水自殺をとげたといういたま 服した。教会への出席を怠って消極的反抗を示す者もいたが、枢密院にとがめられるとすぐに命に服した。ただ、 記録に残るような抗議運動はなく、プロテスタンティズムの影響下にあったとされる商人層や富裕市民もメアリに 地ともカトリック復活へのまとまった形での反抗は少なかった。内部に二派の分裂を抱えたブリストルにおいても、 、5~を数多く聞くのです」といった様子であったし、メアリ時代に多くの殉教者を出したコルチェスターでさえも、6(3) アリがジェイン・グレイに対抗して即位宣言をした時には、支援物資をメアリに送っているのである。そして、各 しない……ある者は死者のために祈ろうとし、またある者はしようとしない。私はあなた方の中にこのような不和

を得なかったのである。また、教区の教会委員に選ばれたのが、多くは上層市民であり、その地域社会の有力者で(33) 人々の行動を規制する「枷」としてかなり有効に機能したことが指摘されている。これに対して、(%) めてゆく上で必要な人々の服従を得るために、常に、様々な手段を用いて国王側から説かれ続けたのであったが、 とを恐れた。その上、服従の義務の観念が彼らを捉えていた。この服従の義務の理念は、宗教改革を国家主導で進 たように、ジェントリ達は改革の過程で利益を得ていたし、都市民も反乱による混乱が経済的不利益をもたらすこ の指導的立場につくべき貴族、ジェントリや指導的市民が国王への服従を選んだことが原因であった。先にも触れ 裂させ、麻痺させてしまうものではなかったと言える。このような不満が蜂起という形をとりにくかったのは、そ(3) しかし、全体的には教区民間の分裂は、より大きな反抗運動や蜂起に至ることは稀で、その地域社会を完全に分 抵抗のイデオロギーを持ち得なかった反抗運動は、こういった指導者が服従に転ずるや否や崩壊へと向わざる 服従論に阻まれ

ンスもの出費となった。

あったと思われ、当然、その各時期の宗教政策への対応も消極的なものとなっただろう。(33)

五

たか、 ある。ブリストルのクライスト・チャーチでは、書籍代だけで七ポンド以上、その他ルード・ロフト再建に一〇ポ は、 の即位によって再び撤去されねばならなかったのである。) ただ、この際、再利用できる設備をどれだけ維持してい(32) その費用の捻出のために教区民が寄付金を出している。(そして、これらのルード・ロフトは数年後にはエリザベス 略奪された物品の回収は困難を極め、以前に撤去したものの再利用というよりも、むしろ新規購入を意味したので にされ聖書の言葉が記された壁をもとの壁画に戻さなくてはならなかった。しかも、 ペンスであったが、オール・セインツ教会では、高価な祭服を購入したせいもあって、三一ポンドハシリングハペ ンドもの支出となっている。エクセターの聖ペトロック教会でもルード・ロフト再建に一〇ポンド要しているが、 再び教会の改修費が必要となった。没収、売却などで失なわれた礼拝用具を再び揃え、祭壇を再建し、 カトリック信者の教区民が礼拝用具を隠していたので、それをそのまま用いて総額一三ポンド一一シリング四 五五三年のメアリの即位は事態を一八○度転換することになった。カトリック復活を喜ぶにせよ、悲しむにせ あるいは購入品の質の相異等によって教区毎に支出額には幅があった。同じブリストルでも聖ヨハネ教会で 後でも触れるように、 かつて 白塗り

公私にわたる収奪を受けた上に、短期間に何度も多額の出費を強いられたことが、教区民の間に軋轢を引き起こす これ程の金額を支出し得たのは、おそらくブリストルが裕福な都市であったためである。もっと貧しい教区では、

ことにもなった。その興味深い例がヨークシャにある。ヨーク効外のイージングウォルドの教会委員達が、 ラスケルの住民に対し教会整備の費用の一部負担を求めた訴えの主教裁判所の記録である。

ージングウォルドの住民と同じように負担者となることを切に望んでいる。」 教会の修理及び礼拝用具に要された費用。この費用に対してイージングウォルドの住民は、ラスケルの住民がイ ースレイ及びジョージ・テューにより、現在の女王陛下の即位以降、すなわち、女王の治世第一、二、三年の同 「イージングウォルドの教区教会の教会委員たるウムフレイ・ステイブリ、 トマス・トレウィット、 トマス・リ

メアリ時代に購入し、もはや不用となったロウソク代を支払っている。(タイ) 入の支払いが次の治世まで残ることさえあった。エクセターの聖ペトロック教会では、エリザベス時代になっても、 区にすぎなかったことからもうかがえる。エドワード時代に礼拝用具を売却して六〇ポンドの収益をあげたロンド(35) して五ポンド程の支出をしているにすぎない。これでは旧状に復するのは不可能であった。(36) ンの聖ボトルフ教会でも、 れ、必要な礼拝用具の準備ができるか、壁の聖書の文句を消せるかと尋ねられた時、 求通りにすることが困難であったことは、一五五五年にノリッヂ市の一七教区の教会委員が主教裁判所に呼び出さ れだけでも隣り合う村の住民達の間に不和が生じた訳である。実際、教会の再整備がかなりの負担で、国王側の要 前までこと細かく記されている。丸二年間の支出総額は一〇ポンド弱で、ブリストルに比べて少額ではあるが、こ(37) 聖書の文句を白塗りするための石灰、祭壇再建、オルガン修理から器具や祭服の洗濯代に至るまで、支払い先の名 以下、支出項目の表が添えられているが、ガラス窓の修理、ミサ本等の購入、鐘の修理、祭服購入、おそらく壁の その収益を国王に収奪されてしまった後では、記録に残る限りではカトリック復活に際 可能であると答えたのは五教 しかも、 前の治世の購

Ž,

プールの直轄管区が治世半ばを過ぎてこの有様であった。

察は全部で二三八教区を巡り、 から七月にかけてプールの命により、主教ホワイトによって行われたリンカン主教区の巡察の報告である。(38) ない状態で、 たりして彼の管理下にあったということである。また、同じような立場にあったリンカン主教の管理下にあったも ているのだが、ここで注目すべきことは、 荒廃している教区が極めて多いということである。 ある。ここからうかがえる顕著な問題点は、メアリ即位後三年を経過しているにもかかわらず、 ト像のない教会二二、礼拝用書籍のない教会六一、等々、といった状態である。(40) らなかった。 伝えてくれる。調査した全ての教会でミサ祭服や祭壇用の絹の掛け布が整っておらず、四七の教会が祭壇すら持た 大執事ハープスフィールドによって行われたカンタベリー主教区の二四三教区を巡った巡察が、より詳しい内容を このような混乱を経て、メアリ時代の教会がどのような状況にあったかを示してくれる史料が、一五五六年五月 プールがその修理のために金を与えたという記録はわずか一例しかなく、その改善の困難さをも十分にうかが 多さも目を引く。 しかし、 聖杯や聖皿さえない教会が各々二四、三五もあった。この他、聖水盤のない教会四五、 九○の教会で副祭壇を欠いていた。 といった簡単な記載で、 リンカンの史料では教会の荒廃の存在は知り得るが、そのほとんどが、"Cancellum eccl'ie 彼ら自身、 その範囲もほぼ主教区全体をカバーしている。その調査内容をまとめたのが別表で(39) 教会改革を目指しながらその膝下の教会がこの有様であったとは皮肉であり、 より具体的な内容に触れることは少ない。この点については、 その四割にあたる六三教区がプール自身が所有したり、 六○の教会で祭壇の十字架がなく、 調査された教会のほぼ六割ほどが何等かの形で修復を必要とし かつてのクランマーの膝下とはい 四三の教会で祭壇の燭台す 内陣や教会施設が パトロンであっ 十字架キリス 一五五七年に この巡 ŧ

表・1556年のリンカン主教区巡察記録

I 教会関係	市じず		
1 教本党体		(管理責任者)	
		プール	63
		リンカン主教	24
内陣・教会施設の荒廃	151#4=	国王・女王	3
ド 11年 ・ 秋 云 /地 記 V 7 元 /発	151教区	俗人	23
		その他教会関係者	2
		不明	36
		プール	10
司祭が欠員	0.00	国王・女王	1
· 以示从"人員	27 "	リッチフィールド主教	1
		格人 不明	9
(収入の乏しさのために		(プール	6 5 \
欠員である教区	10 🥠	} グーク・ 俗人	$\begin{pmatrix} 3 \\ 5 \end{pmatrix}$
不在任	8 /	()	0 /
		[服従者	6
妻帯聖職者	9名	(内、聖務機能回復者	3)
		逃亡者	3
聖職売買	3件		
告解を受けずに聖餐を与えた司祭 四旬節に肉食した司祭		全員服従	
四町即に内良した可奈	1 //	服従、侮俊	
Ⅱ 俗人関係			
		(服従者	9
告解・化体説等の否定	12名	海外逃亡	2
		火刑	1
カトリック的儀式批判	1	服従	3
	* 1	逃亡	1
「宗教的理由」による逃亡 ロウソクの奉献拒否	3 /		
行列への不参加	3 "	A B 1110/ /6//s	
四旬節の肉食	10 %	・全員服従・侮俊	
祭日の労働	2 "		
#b ヘフ there	(服従	4
教会不出席	5 // {	逃亡	1
教会財産の私用・収奪・破壊	11件		
元修道女との結婚	3 /	全員服従・離婚	
<u></u> 五	7 "		
私生児出産	8 "		

が荒廃していた。

条件であったのである。

うかがえるが、この問題は単に教区教会レベルにとどまるものではなく、 離すのを拒否したことは先にも述べた通りである。 的に保守的な者であっても、大は元修道院領から小は教区教会の礼拝用具に至るまで、ひとたび手にした利益を手 ら揺るがす大きな政治的問題でもあった。 レスデン教区や、 明記されているのは一名にすぎない。また、レクトリーを買収した俗人は、当然そこからの収益を期待していたた -時代以来俗人の手に渡った修道院財産等の返却を求めることを断念することが必須の条件だったのである。(41) こういった回復の遅れは、 その教会の整備は意に介さない傾向が強かった。 個人による取得や教区ぐるみでの教会財産売却であったり、ジェントリによる買収、 荒廃してけものが徘徊していたノートン教区のように、俗人によって買収された教会のほとんど 先に没収、 略奪された教会財産の回収の困難さによっても助長された。 ローマとの和解や異端法の復活といった政策を可能にするには、 リンカンでも教会財産に関する訴え一一件のうち、 リンカンでも、 内陣も墓所も荒れ、礼拝用具すらなかったビ プールのカトリック復活の企てを根底か 略奪や占有、 リンカンの記 返却したと 等々が ヘンリ 宗教

しても、 祭壇に利用した教会すらあったことが後に報告されている。これでは、いくら人々がカトリックの礼拝に従おうと(42) かなりの教区がメアリ時代を通じて何ひとつ礼拝用具を持たないままエリザベス時代を迎えたし、 かつての姿を再現することは不可能であった。 リンカン主教区では、 この巡察記録でも 「修理がなされた」という記載のあるものは七件にすぎない しかし、これらの教会の整備こそがカトリック復活の必要 また墓石を よう

次に問題となるのが、欠員であったり、不在任であったりして、聖務を行う者がいない教区がかなりの数にのぼ

るという点である。

仕事」に直面していたのであった。(46) ずかなものであることが多かったことが指摘されている。また欠員とならなくとも、その収入の乏しさや荒廃のた(ホヒ) 第一の原因は、おそらく、宗教改革の開始と共に顕著となり、当時慢性化していた聖職者の絶対的な不足であった を余儀なくさせ、不在任を新たに生み出すことにもなるのである。しかし、何といっても欠員を改善し得なかった(キヒ) 時期と重なることにより、経済状態が悪化した小額の聖職禄受領者や固定給の教区司祭に、生活維持のために兼任 めに、十分な聖務が行えない状況に置かれていた教区もあった。この禄の貧しさという問題は、急激なインフレの 手にあったが、先にも触れたように、俗人はそこから自らの利益を得ようとしたため、教区司祭へまわす給与はわ 単に皮肉とばかり言えない、彼の抱えた問題の根の深さとその解決の困難さをうかがわせる。あとの五つは俗 の貧しさ故に牧師補すら雇うことができなかった。しかもこの点でも、 員の三分の一の一○件までが、その収入の乏しさを理由にあげている。バッキンガムシャのダントン教区では、そ であった。しかし、この問題は単にパトロネジ保有者の怠慢からのみ生ずるものでもなかった。 誰もその禄を受けることを望まず、何年も欠員のまま放置されることも多かったようである。 いずれをとってもプールの理想とは程遠いものであったと言えるだろう。まさに彼は「ヘラクレスのような もちろん、 - まだ妻帯を続けていた聖職者、聖務怠慢、聖職売買、等々、聖職者をめぐる問題が数多く報告されてい しかるべきカトリック司祭の不在ということも問題の解決をより困難にしたと思われる。 しかも、ここでも、欠員教区のうち、三分の一以上にあたる一○教区がプールの管理下の教会 一〇件のうち五つがプールの管理下にあり、 禄自体の貧弱さか リンカンでも欠

教区民の方へ目を向けてみると、この時代によく見られた問題が並んでいる。化体説や告解の意義を否定する者、

必ずしも迫害をのみ望んだのではなかったことが注意されなくてはならない。多くの殉教者を出したロンドン主教(タイ) あった。 この服従的態度こそが、その前後の国王達と同様に、プールも求めたものであり、 ように命じられ、また「市場で、手にロウソクを持ち、素足で、帽子をかぶらずに侮俊の意を表明」するのである。 王側に服従している点に注目すべきであろう。「次の日曜日に、祭壇の前で公に教区民の面前で、秘密告解を為す」 会の荒廃ぶりと俗人による教会占有の様子がうかがえて興味深い。しかし、ここでは摘発された者のほとんどが国 代になって不法なものとされた)姦通、等々である。また、教会内で牛を飼育していた者が告発されているが、教 ロウソクの奉献を拒否する者、 それ以上は心中に秘めた良心の領域であった。ここで、プールをはじめとするいわゆる「迫害者」達が、 教会財産の収得、 元修道女との結婚 (修道院解散後に認められていたが、 また、 人々に求め得た限界でも メアリ時

区でも、その背後に多くの棄教者、 六名にすぎなかった。このリンカンの記録でも、宗教イデオロギー関係の罪で摘発された四三名のうち、処刑され(48) 判記録のうち、 殉教者は三名だけであったし、ミサを否定した廉で告発された者九〇名中、 服従者がいた。一五五四年一一月から翌年三月までの五箇月間の四七〇名の公 自ら罪状を認めたのは

たのは一人だけで、逃亡者も四人にすぎない。

従って、

がえるように思われる。 開始以来説かれ続けてきた「服従の義務」の理念の強さ、エドワード時代のプロテスタント化の脆弱さなどがうか

この記録にプロテスタンティズムの浸透の姿を見ることはふさわしくないだろう。むしろ、

守的であったとしても、この激しい宗教状況の変化は人々の宗教に対する意識を変えずにはおかなかっただろう。 「服従」と積極的なカトリック信仰ともまた別のものである。 当時の人々が従来考えられてきた以上に保

のである。このような例が各地で報告されているが、こういった遺言状は、その書かれた意図が、本心からである(40) (50) (50) な魂の救済を求めながら、葬儀の際に、司祭が「私の魂のためにミサをとり行って祈ってくれるよう」求めている にせよ、本心を隠すためのものであったにせよ、当時の人々の屈折した心理を示すものと言えるだろう。 にして私の救い主イエス・キリストに、私を彼の慈悲の下に置かれるようお願いいたします」とプロテスタント的 とカトリック的要素の混在した遺言状の存在である。「私は私の魂を全能の神にして私の創造主にゆだね、その息子 なったに違いない。この当惑の反映を当時の遺言状に見ることができるだろう。すなわち、プロテスタント的要素 目に見える形で、しかも経済的負担を伴なっての教会の変貌は、聖職者の説く教義の変化以上に宗教改革の存在 を印象づけ、人々は、もはや宗教とは唯一不変のものではなく、変化するものであるという現実に当惑することに

なるだろう。 に見られた信仰と世俗的利益との矛盾と共に、矛盾のまま残され、この後の時代の宗教意識を形成してゆくことに は考えにくい。当然、ここに信仰と服従の矛盾が生ずることになるが、この矛盾は、おそらく教会財産の収得の際 る」と考えるようになったとしても当然であろう。しかし、人々が教会の変化に合せて、自らの信仰も変え得たと(52) 手を鈍らせることになったとも考えられる。この時、彼らが「宗教では、多くの人がするようにするのが安全であ いうだけでなく、経済的疲弊もその一因であろうし、次の変更がまたやって来るかもしれないという不安が改修の メアリの治世が五年で幕を閉じ、再び教会の状況が一変した時、このような状況に追い打ちをかけることになっ エリザベス時代に各地で報告される教会でのカトリック的要素の根強い残存は、単に保守的な教区であったと

しかし、真のカトリック信仰の復活を願うプールの望んだのはこのような人々ではなかった。

教義よりも政治的

ことによって、

分裂がもたらした混乱から抜け出ることができず、頓挫を余儀なくされたのだと言えよう。

エリザベスが引き継いだ教会とは、まさしくプールが苦闘したこの教会であった。その上、

彼女自身の即

位によ

その混迷はより深まっていた。エリザベスは、これらの教会をめぐる様々な問題をひとつひとつ解決してゆく

自らの教会を確立してゆかなければならなかったのである。

は期待し得ないのである。その上、このような屈折した人々をカトリック信仰へ引き戻すべき教会は、先に述べた カトリックの「精神」の復活を考えたプールにとっては、 経済的利益を求めたヘンリーや現世的利益のためにプロテスタンティズムを利用したノーサンバランド公と違って、 単なる服従では意味がなかった。そこには精神的な成果

ような有様であった。

これでは望ましい形でのカトリック礼拝の復活は期待し得なかった。さらに、この時期の聖職者不足やしかるべき を阻んだ。また、より平凡な教区民も当惑と不安によって屈折した感情を抱くようになっていたのである。 教会をめぐる俗人達も、ローマとの断絶を経て、プールが考えた以上に世俗的利益に囚われており、教会の正常化 活の基盤となるべき教会はエドワード時代のプロテスタント化や収奪の後遺症に苦しんでおり、その改善は、 全てを解決するには、プールに許された時間はあまりに短かかったのである。結局、 カトリック司祭の不在といった聖職者をめぐる問題もからんで、より錯綜した様相を呈することになっただろう。 ル自身の管理下の教会すらままならぬ程の人的、物的な障害に阻まれて、即座に成し遂げられるものではなかった。 このように、プールの直面した問題は、おそらく彼が初め考えていた以上に深刻であっただろう。 プールの計画は、 カトリック復 ローマとの

- O
- (-) Powick, F.M., The Reformation in England, London, 1941, p. 1.
- 2 近年のイングランド宗教改革の研究史については、Haigh, C., 'The Recent Historiography of the English Reformation' Historical Journal, 25 (1982), pp. 995-1007 を参照。
- (α) Bindoff, S. T., Tudor England, Harmondsworth, 1950, pp. 181-182.
- $\widehat{4}$ 一五三六年の勅令、第八項。Williams, C. H.(ed.), English Historical Documents, V, 1485-1558, London, 1967. pp.805
- (5) 例えば、一五三八年の勅令、第一一項 (ibid., pp. 811-814)。
- 6 Proclamations, New Haven, 1969, Vol. II, pp. 35-38 所載。 一五五四年三月四日の布告のことと思われる。この布告は、Hughes, P.L. and Larkin, J.F. (eds.), Tudor Royal
- 7 of Historical Research (以下 BIHR と略記) LV(1982)pp. 99-101. English Protestant Woman: the Recollections of Rose Hickman', (Notes and Documents), Bulletin of the Institute Dowling, M. and Shakespeare, J. (eds.), Religion and Politics in mid Tudor England through the Eyes of an
- 8 Schenk, W., Reginald Pole, Cardinal of England, London, 1950, pp. 143-144.
- (Φ) Hughes and Larkins (eds.), op. cit., p. 37.
- 10 Bettey, J. H., Bristol Parish Churches during the Roformation c. 1530-1560, Bristol, 1979, p. 10.
- 11 Hughes, P., The Reformation in England, London, 1950-54, II, p. 159.
- 12 Pollard, A. F., The Political History of England, 1547-1603, London, 1910, pp. 73-74.
- 13 Nichols, J. G. (ed.), Chronicle of the Grey Friars of London, Camden Society, 1852, rep. 1968, p. 77.
- $\widehat{14}$ Scarisbrick, J. J., The Reformation and the English People, Oxford, 1984, p. 84.
- Cloucester and Cities of Gloucester and Bristol', Transactions of the Bristol and Gloucestershire Archaeological Bettey, op. cit., pp. 11-12; Maclean, J. (ed.), 'Inventories of, and Receipts for, Church Goods in the County of Society, XI (1887-8), pp. 89-91.
- <u>16</u> Atkinson, A.G.B., 'Reformation Changes in a City Parish', English Historical Review, XI (1896), pp. 524-525.

- <u>17</u> Manchester, 1965, p. 173 Scarisbrick, op. cit., pp. 94-95; Bettey, op. cit., p. 12; Oxley, J.E., The Reformation in Essex to the Death of Mary, Houlbrooke, R., Church Courts and the People during the English Reformation, 1520-1570, Oxford, 1979, p. 153;
- (\(\frac{\pi}{2}\)) \(\begin{align*}{c} \begin{align*}{c} \begin{a
- 19 Palliser, D. M., The Reformation in York, 1534-1553, York, 1971, p. 15; id., Tudor York, Oxford, 1979, p. 237.
- (\mathfrak{A}) Oxley, op. cit., pp. 252-253
- 21 Dickens, A. G., Lollard and Protestants in the Diocese of York, 1509-1558, Oxford, 1959, p. 208
- (2) Scarisbrick, op. cit., ch. 5.
- of Queen Jane, and Two Years of Queen Mary, Camden Society, 1850, rep. 1968; id (ed.), Diary of Henry Machyn, Citizen and Merchant-Taylor of London, Camden Society, 1848, rep. 1968. ロンドンについては、次の文献を参照のこと。Nichols (ed.), Chronicle of the Grey Friars; id. (ed.), The Chronicle
- 24 Martyrs and the Reformation in Bristol, Bristol, 1972, pp. 8-9. Edgeworth, R., Sermons very fruitfull, godly and learned (1557), sig Egg iv, quoted in Powell, G.K., The Marian
- (2) Nichols (ed.), Chronicle of Jane and Mary, p. 112.
- (%) Powell, op. cit., p. 16.
- 27 Nichols, J. G. (ed), Narratives of the Days of the Reformation, Camden Society, 1859, rep. 1968, p. 31
- 28 1975, pp. 188-190 参照。 エクセターがこの点について典型的な例を示している。MacCaffrey, W. T., Exeter, 1540-1640, 2nd. ed., Cambridge Mass.,
- 29 2nd ed., Lordon, 1973 等を参照のこと。 Present, 48 (1970); Jones, W. R. D., The Tudor Commonwealth, 1529-1559, London, 1970; Fletcher, A., Tudor Rebellion, rep. 1966; James, M. E., 'Obedience and Dissent in Henrician England: The Lincolnshire Rebellion 1536; Past & 国王への服従の義務の理念については、Baumer, F. Le van, The Early Tudor Theory of Kingship. New Haven, 1940,
- (\mathfrak{S}) James, op. cit., p. 29.
- 31 例えば、エクセターの聖ペトロック教区では、後に市長や州長官になっている者が多い(Dymond, R,(ed.), 'The History of the

- 32 Parish of St. Petrock', Transactions of the Devonshire Association, XIV (1882), pp. 402-92.)°
- 33 Ibid., pp. 456-459; Bettey, op, cit., pp. 15-16.

Borthwick Institute of Historical Research, Casepaper, Archepiscopal Courts, G. 608, printed in Sheils, W. J.

35 (compiled), The Reformation in the North to 1558, York, 1976, no. 10. 34

- 36 $Atkinson, \mathit{op.}\ \mathit{cit.},\ p.\ 526.\$ ホールブルックもメアリ時代の教会整備の遅れの原因を第一に教区財政の窮乏に求める Houlbrooke, op. cit., p. 116.
- (Houlbrooke, op. cit., p. 167)°
- 37 Dymond (ed.), op. cit., p. 457.
- 38 当時のリンカン主教区の範囲は、リンカンシャ、レスターシャ、ハンチンドンシャ、ベドフォードシャ、バッキンガムシャ、 Printed in Strype, J., Ecclesiastical Memorials, Oxford ed., 1822, III pt. ii, pp. 389-413, from "Foxii Mss."
- ハーフォードシャの六州である。
- 40 Hughes, op. cit., II, p. 237.
- 41 元教会領の扱いの問題は、メアリと貴族層の間にも不信を生み出していた(Loades, D. M., The Oxford Martyrs, London, 1970, pp. 145-146; id., The Last Years of Cuthbut Tunstall,1547-1559, Durham, 1973, p. 14)°
- $\widehat{42}$ 一五六六年に一五三教区を調査したうち、二○教区で礼拝用具が全くなく、四九教区が不備であった(Hughes, op, cit., Ⅱ
- 43 Pogson, R. H., 'The Legacy of the Schism: Confusion, Continuity and Change in the Marian Clergy'in Loach, J. and Tittler, R. (eds.), The Mid-Tudor Polity c. 1540-1560, London, 1980, pp. 128-129,
- 44 Bid., p. 129; id., 'Revival and Reform in Mary Tudor's Charch: A Question of Money', Journal of Ecclesiastical
- History, xxv(1974), pp. 251-252; Hodgett, G. A., Tudor Lincolnshire, Lincoln, 1975, p. 179,
- 46 45 Schenk, op, cit., p. 144. op, cit., Ⅲ, p. 53; Pogson, 'The Legacy of the Schism', p. 129 等を参照のこと。 聖職者不足については、Bowker, M., 'The Henrician Reformation and the Parish Clergy', BIHR L (1977); Hughes,

51 50

Dickens, op. cit., p. 220; Oxley, op. cit., pp. 259-260

- 47 rep. 1970, pp. 268-269. Persecutions', History, LX (1975), pp. 377-378; Muller, J. A., Stephen Gardiner and Tudor Reaction, London 1926 する態度については、次の文献を参照のこと。 Schenk, op. cit., pp. 151-154; Alexander, G., 'Bonner and the Marian 本稿でメアリ時代の宗教迫害について詳しく論ずる余裕はないが、迫害者とされるプール、ボナー、ガードナーの迫害に対
- 48 Alexander, op. cit., pp. 383-385; Jagger, A. M., 'Bonner's Episcopal Visitation of London, 1554', BIHR, XLV (1972),
- 49 Zell, M. L., 'The Use of Religious Preambles as a Measure of Religious Belief in the Sixteenth Century', BIHR,
- L(1977), pp. 248-249

ヨークシャでは、一五六七年の巡察の際に、まだ聖像や祭壇を撤去せずに、カトリックの礼拝を続けている教会があった

(Parvis, J. S. (ed.), Tudor Parish Documents of the Diocese of York, A Selection with Introduction and Notes,

- D. M., 'Popular Reactions to the Reformation during the Years of Uncertainty, 1530-70', in Heal, F. and O'Day, Cambridge, 1948, pp. 26-27)。 サセックスでも多くの教会が「再びミサが始まるのを待って」聖杯を保持していた (Palliser, R. (eds.), Church and Society in England: Henry VIII to James I, London, 1977, p. 44)°
- 52 Foundation of the Christian Religion (1595) 45° Stone, L., The Causes of the English Revolution 1529-1642, London, 1972, p. 81. 引用はウィリアム・パーキンズの